



人になること（4） 榎本栄次

聖書の中には、麦と毒麦、羊と狼、天使と悪魔、善人と悪人といった二律背反するたとえ話が多くある。悪人は裁かれ、善人は神の国に迎えられられるということである。教育の世界でも「腐ったミカンにはやく取り除けるべき」と言われたりする。問題の子どもは、他に悪影響を及ぼすから早く除く方がいいということだろう。

しかし人間はみかんではない。その人が善人か悪人かは簡単に区別できない。一人の中に良いものもあれば悪いものもあって、その間を行ったり来たりするのが本当だろう。良い人と思っていられなくてもない人であったり、どうしようもないと思われる人が、後に無くてはならない存在に変えられることがある。これが教育であり、おもしろい人間の本质ではなからうか。

N が問題を起こして自宅謹慎になった。「次に何か問題を起こしたら退学」ということに署名させられていたのでもう後がない。生活指導の先生に事情を聞いて、彼に抱いていた期待は崩れ去った。聖書科の1講師である私にできることはもう何もない。学校からの帰り道、彼の家へ寄ってみた。

炭鉱離職者が多い団地の中の住宅である。呼び鈴を押すとNが顔を出した。何しに来たと言わんばかりの顔である。両親は働きに出てN一人らしい。

「どうしてる。入れてくれや」と頼んで中に入った。

「お茶くらいないのか」

「そんなもの無え。何しに来た」

「どんな顔しているか見に来た。これからどうする」

「先公ぶんなぐって、学校辞めてやる」こぶしをついて息巻く。

「そうか、先生ぶんなぐって辞めるか。そんなつまらんことやめとけ。それより、クラスに手紙を書け。『俺は戻りたい。反省しているからもう一度だけチャンスくれ』と手紙を書きな。そんなことしても退学になることは

変わらないだろう。それでもここで、先生を殴って辞めるのと、反省文を書いて皆に頼んで、それで辞めるのとは、これからのお前の人生にとって天地の差がある。どん底に落ちるかこれから上がるかの違いだ。誰のせいでもない自分のせいでこうなっているのだから迷惑かけてすまなかった、と言って謝って、頼め」。

こう言って帰った。Nは本気で次のような手紙をクラスと校長に手紙を書いた。

「みんなに迷惑をかけてすまない。自分はこれまで何でも人のせいにしていた。気に入らないことがあるとすぐに暴力に出ていた。今から自分を変えたい。本気で反省するからもう一度僕を学校に返してほしい。調子のいいこと言うなと思うだろうが、本気でやる」。

担任はコメント抜きにこの手紙をクラスに紹介した。クラスの話合いが始まった。

「俺たちはもう3年生だ。せっかく落ち着いてきたのにNがもどってきたら、またクラスが荒れる。俺は嫌だ」

「正直、Nがいなくなってほっとしているんだ。静かにしてほしい」同意する声が続いた。

冷たい雰囲気支配した。Nの仲間が立った。

「みんなの気持ちはよくわかる。でも考え直してくれないか。たのむ。一緒につるんでいた俺たちも悪かった。反省するからNにチャンスをやってくれ」

「そんな甘いこと言って、責任とれるのか」

「今は、Nのことではなく、俺の問題だと思っている」

「何かあったら俺らが止めるから。助けてやってくれ」

「俺も反省する。このままだと何も変わらない。Nを含めてみんなが変わろうぜ」。次第に連帯感が生まれて全員の意志でNを復学させようということになった。

「これは学校で決まったことだ。クラスではどうしようもない。校長に頼んで、全校生徒大会を開こう」

担任のA先生は、黙って彼らの話し合いを聞いていた。

こうして全校生徒大会を開くことになった。 つづく

おさそい

12月16日(土) 13時30分

修学院フォーラム～社会～

—核兵器禁止条約を考える集い—

「なぜ日本は「核兵器禁止条約」に賛成できないのか
—何が日本を守るのか—

講師 富田宏治氏(関西学院大学法学部教授)

1月7日(日) - 8日(月・祝)

〈エネルギーを考える 第6回〉

「原発との共存は可能か～フクシマからの問い～」

講師 吉岡齊氏(九州大学教授、福島原発事故政府事故調査委員)

島藺進氏(上智大学大学院実践宗教学研究科教授・グリーンケア研究所長、東京大学名誉教授)

投稿

京都俳句きらら会

- ・まつり終え山を仰げば空に虹 榎本虚舟
- ・蜘蛛の巣の網目に透ける秋の空 佐々木公女
- ・雨上がり白い山茶花道に散り 小久保枯骨
- ・飛行雲夕日串刺し冬の空 久保海楽
- ・山々に柿色づき路通ふ 原岳
- ・リュック背に落ち葉踏みゆく老いの坂 佐々木小次郎
- ・銀秋を独り占めしてドローン飛ぶ 松本茶香
- ・お茶の味深くなりたる冬はじめ 松野洋子

なんどきですか



・クリスマスおめでとうございます。まもなくこの年も暮れようとしています。思い起こせば、楽しいこともありましたが、反対に生木を裂くような事件に出会い、「どうして」と言いたくなるような悲しい出来事もありました。それでも、時代は続き、神の御心が進んでいます。

・今年の記念すべきことは、国連総会で「核兵器禁止条約」が3分の2以上の賛成で決議したことでしょう。続いてその運動を進めてきたアイキャン(核兵器廃絶国際キャンペーン)がノーベル平和賞を受賞したことも大きな喜びです。残念なことは核保有国がこれに参加しようとしないうこと、唯一の被爆国である日本が反対していることです。

・平和への流れはだれも止められない神の意志です。それに協力する年でありたいと願います。

関西セミナーハウス活動センターへの賛助・寄付金

2017.11.1-30 順不同・敬称略(もみじまつりは別途報告)

山田幸子、和田野勢津子、小山稔・初美、坂口みどり、網野俊賢、松本圭子、木下壽子、多木秀雄、中村信博、藤田俊文・恭子、岩橋龍男、川北かおり、杉本益男、匿名氏、山添みどり、北垣宗治、佐藤全弘、榎本栄次、根岸宏邦、水戸潔、匿名氏、京都キリスト教協議会(KCC) 間瀬啓允、塚本誠一、樋口よう子、鳥井清司、高橋壮二、日本基督教団希望ヶ丘教会 ありがとうございます。

関西セミナーハウスの四季だより

関西セミナーハウスの紅葉

関西セミナーハウスの紅葉も西側は艶を落として、舞い落ちるようになりました。東の山裾に近い辺りは、陽を受けて、今が一番美しい時で、かやぶき屋根との組み合わせは最高の被写体です。

「黄葉(もみぢば)の散りゆくなへに玉梓(たまづさ)の使(つかひ)を見れば逢(あ)ひし日思(し)ほゆ」柿本人麿

紅葉(黄葉)の散り様は、冬に向かう冷え込みと日差しのなかで、もの悲しい哀れさを誘います。上代でも柿本人麿の読むように、「舞い落ちる紅葉の中を妻の死を知らせる使者が現れる」という、胸をつかまれるような心の痛みと妻を思うほろ苦い哀愁をより一層際立たせるものです。しかし、秋が終わり冬の先には春があり、また新しい命が生まれるもの。冬枯れに向かう木々はすでに来年の命をその枝や幹に蓄えているのです。葉を落として見通しの良くなった森には、冬を越す生き物たちの活動のあとを観察することが出来ます。別れの次に来る新たな出逢いを期待したいものです。

関西セミナーハウス館長 久保田展史

発行所 公益財団法人日本クリスチャン・アカデミー 関西セミナーハウス活動センター

発行人 所長 榎本栄次 住所 606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町 23

電話 075-711-2117 E-mail: office@academy-kansai.org